



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学



2009年
9月発行
Vol.2

教育GPニューズレター

巻頭言

FD委員長 富士 隆

なぜFDに取り組むのでしょうか？

わが国では、18歳人口の減少によって大学全入時代を迎え、多様な学生が年々増加しています。そのために、大学入学生に対するリメディアル教育と大学教育の質保証が重要になっています。そんな中で、大学におけるFD（ファカルティ・ディベロップメント）が、2008年4月から義務化され、本学でもFD委員会を設立し、その活動が全学的に開始されました。また、平成20年度の教育GPにも採択されたことで財政的な支援を得て、「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」に取り組んでいます。本学のFD活動の特徴は、ICTを利活用して教育の質を向上させる点にありますので、今回は、なぜそのようなことに取り組む必要があるのかを、皆さんと今一度いっしょに考えてみたいと思います。

「この国は減じる？」

平成21年1月12日、13日、横浜で文部科学省主催の「平成20年度大学教育改革プログラム合同フォーラム」が開催されました。総額680億円、教育GPを含む14のプログラムの合同フォー

ラムで、本学の教育GPプロジェクトの取り組みも発表しましたが、その基調講演等での中央教育審議会のメンバーからの発表は、わが国の大学教育の危機を強く訴えるものでした。それは、「学部の学生の質の向上なくして日本の将来はない」ということです。大学教育の改革には、「教育の質の改善」と「財政支援」が必要ですが、世間から今の大学生は遊んでいると見られているような状況では、財政支援が必要といっても、世間の理解が得られない。従って、「大学は、教育の質の改善に向けて取り組むしかなく、教育改革に向けて努力しない大学は退場すべき」と主張しています。これらの意見に対して、皆さんはどうお考えになりますか。私どもの大学は、小さな大学ですけれども、その場から退場するわけにはいかないのです。ここに、FDに真剣に取り組む1つの理由があります。

「大学は環境の変化に適応している？」

大学は、多様な学生の増加によって、大学で学ぶために必要な基礎学力が不十分な学生や大学で学ぶ明確な目的を持たない学生への対応に迫られています。一方では、中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」で示されているように、学生が

目次

1. 巻頭言…………… 1
2. GPAを利用した学習指導について…………… 3
3. FD活動のためのFAQ…………… 4
4. FD活動 今後の行事予定…………… 16
5. 編集後記…………… 16

卒業するまでに身につけるべき「学士力」を保証するための教育の改革が求められています。環境の変化に対応できなければ、世界のGM（ゼネラルモーターズ）でさえ、崖っぷちから転げ落ちる時代です。われわれを取り巻く環境は、厳しいものがありますが、嘆いていても仕方ありません。ICTを活用することによって教育効果を高めることができます。米国の大学では、授業料収入の4%から8%をICTに投資することで教育効果を高めています。本学でも、先の現代GPで開発したPOLITE（学習者適応型e-Learningシステム）では、ICTの教育効果を検証し、一部の科目ではありますが正規授業で活用しています。本学の強みであるICTを利活用しながら教育の質を向上させるためのPDCAサイクルを組織的に行っていくことが重要です。そのためには、図

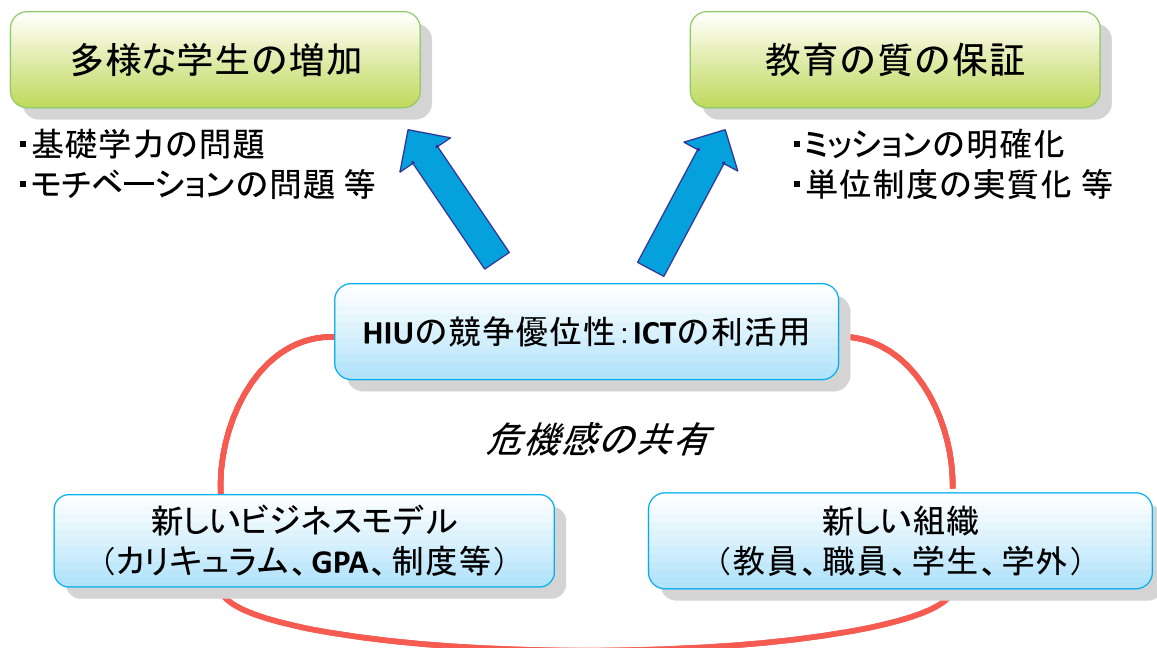
にも示してあるように、ICTを活用して教育の質を高めるためのFD支援システム（CANVAS）の開発と併せて、現在進めているカリキュラムの見直し、GPA制度、チュータ制度、Own Teacher制度などの導入、学生による授業評価アンケート、ピアレビュー、外部アドバイザーによるレビューなどの総合的な評価システム、そして、学習支援センターの実質化など新しい組織の確立といった、先進的な情報システム、新しいビジネスモデル、そして新しい組織の確立によって、この危機を次への発展のチャンスと捉えようではありませんか。ここに、FDに取り組む2つ目の理由があります。

FDの成果は誰のため？

教職員が一丸となって取り組んだFDの成果は、学生に還元されなければなりません。従来

よりも、より分かりやすく、より楽しく、しっかり学べるような学習環境を構築することで、学生が主体的に学ぶようになることを目指しています。ただし、新しい環境になっても変わらない大切なものがあります。それは、教職員と学生の面談をベースとしたコミュニケーションです。学生の人格を尊重し、「大切に育てる」という親子心を根底に持ちながら、しっかり指導することが、いつも求められているのではないのでしょうか。ここに、FDに取り組む3つ目の理由があります。

今回のFDニューズレターでは、本学のFD活動の理解を深めていただくために「FD活動のFAQ」を掲載してあります。各WGの活動の趣旨や内容などがわかりやすく説明されていますので、是非ご一読ください。



9月にGPA記載の成績表配布

ご承知のように、本学では今年度から成績評価にGPA（Grade Point Average）制度が試行の形で導入されました。GPAは、大学の認証評価の対象項目でもあることから、事実上、国内の大学では必須の制度となっています。

既に3月11日、7月24日と、2回にわたる説明会で本学におけるGPA制度の概要をお話させて頂きましたが、9月のスタートアッププログラムでは、いよいよ今年度前期のGPAが記載された成績表が学生に配布されます。そのため、このニュース・レターではGPAを利用した学習指導に絞って説明することにします（GPAの基本的な事柄について知りたい方は、後のページに収められているWG3のFAQをご参照ください）。

学生も教員も考え方の転換を

GPAの導入と、それを利用した指導が始まるのに伴い、学生も教員も今までの考え方を転換する必要があります。というのも、これまでの趨勢として、学生はできるだけ単位を取得するために「保険」をかけ、履修上限いっぱいまで科目を履修登録する傾向が見られたからです。とくに選択科目に関しては、授業の空き時間を作らないためだけに履修登録する傾向が見られました。以前使用されていた授業評価アンケート項目の中に、「この科目を履修した理由」という項目がありましたが、残念ながら、その回答として「時間が空いていたから」という選択肢を選ぶ学生が少なくなかったのです。

教員の方も、そうした学生の傾向をある程度把握しながら、「保険」をかけることを黙認する傾向がなかったとはいえません。そもそも進級、卒業条件が取得単位数で規定されている以上、学生の科目履修登録数が多いことを肯定こそすれ、否定的に見る必要はないとの認識がかなり一般的だったのではないのでしょうか。

しかし、GPA導入を機会に、単位の「質」を保証する方向へ考え方を変えていく必要があります。つまり、むやみに履修登録するのではなく、学習の目的を明確にして履修科目を厳選し、履修した科目は途中で放棄せずに最後まで十分に学習する、というサイクルを学生が確立する必要があります。教員からの指導は、そのような方向に学生を促す

ことを中心としなければなりません。

そうした考え方の転換を進めるスタート地点が、この9月ということになります。

学生に対する個別面談の指針

スタートアッププログラムで前期の成績表が配布された後、学生を指導する役割を担うのは、原則として、1、2年生の場合はクラス担任、3、4年生はゼミ担当教員になります。時間を見つけて早めに個別面談を行い、後期の履修登録（履修変更）や学習に指導を反映させていくのが望ましいあり方です。

しかし、とくに1、2年生のクラス担任は多くの学生を受け持っており、多い場合には2クラスで60名を超えることから、全員の個別面談を行うのが容易ではありません。そうした状況に鑑み、WG3では、成績不振の学生に対する指導を優先する方策と、その指針について検討してきました。

仮に、すべての科目が「可」の評価を受けた学生を想定すると、GPAは1.0になります。この場合、GPA 1.0でも単位はすべて取得されているわけですが、十分に学習成果が上がっているとはいえません。当然、この学生は履修登録と学習に対する考え方をあらためる必要があります。

では、GPA 1.1や1.2なら学習成果が上がっているかということ、そうはいえませんが、このように線引きは難しいわけですが、WG3としては、一つの目安として、【GPA 1.5以下の学生に対しては必ず個人面談を行って指導する】という考え方を提案することにいたしました。もちろん、GPA 1.6以上の学生は一律指導不要というような、機械的な対応はできませんので、指導の必要性を教員各位が適宜ご判断頂きたいと思えます。

指導の具体的内容としては、成績不振の理由（出席状況、学習状況を含む生活状況、安易な履修登録等）を確認し、後期以降は問題点を改善するよう指導するという事です。この指導は、ひいては学生が抱える問題点の早期発見、退学防止にもつながる要素を含んでいます。WG3の話し合いでは、簡単な面談記録を作成してもらうという案も出ていますが、もしそのようなルールが決まりましたら、あらためてお知らせいたします。

GPAの実効性を高めるために

他大学では、GPAをもとに次期の履修計画について学生を指導するアドバイザー制度を実施している所もあります。この制度では、アドバイザーが承認しなければ、学生は次期の履修登録がで

きません。このような制度を一つのモデルとして視野に収めつつ、本学独自の実効性あるGPA制度を確立していく必要があります。

GPAの算出が回を重ね、時系列で成績の推移を見られるようになれば、指導の参考資料として充実することになるでしょう。また、科目GPAの方も、いずれは時系列の推移を通覧できるようになり、授業改善の参考資料となる日が来ます。

最後に、GPAが単なる数値化された成績評価の平均値ではなく、教育体制全般の改善に寄与する制度となるためには、やはりFD活動の推進が鍵になることを強調しておきたいと思います。

FD活動のためのFAQ

FD委員会は、平成20年4月から組織化され、FD活動を推進しています。

活動は9つのWGに分かれて進められていますが、各WGの活動については、前回発行の「教育GPNユースレター」(Vol.1)で紹介致しました。

なお、後期から新たにWG10として「リメディアル日本語教育検討」が加わりました。

今年、本学は認証評価を受審しますが、活動報告では紹介できなかったことをFAQの形式でまとめました。

日頃思われていた疑問が解消するのではないかと思います。今後のFD活動を進めていくためにも参考にしてください。また、掲載できなかった質問等がありましたら、FD委員会事務局(教務課内)までお寄せ下さい。FAQは11の項目に分けて掲載しています。

1. FD活動全体
2. WG1 - 学生による授業評価アンケート
3. WG2 - ピアレビュー制度の導入
4. WG3 - GPAとコンピテンシーの導入
5. WG4 - ICTの活用推進
6. WG5 - イベント・教育活動支援情報の企画
7. WG6 - チュータ制度の導入
8. WG7 - ファカルティポートフォリオの導入
9. WG8 - カリキュラム・ディベロップメント
10. WG9 - Own Teacher制度の導入
11. 教育GPシステム開発会議-CANVAS

F D活動全体

A-1 F Dとは何ですか。

F Dとはファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development) の略で、「大学教員資質開発」などと訳されています。「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」を意味しますが、それらに加えて、研究活動、社会貢献、管理運営に関わる教員職能開発の活動全般をさす場合もあります。

A-2 F D活動の義務化とは何ですか。

大学設置基準の改正 (平成19年7月31日公布、平成20年4月1日施行) により、努力義務であったF Dが大学に対して義務とされました。大学設置基準第25条の3で次のように定められています。

「大学は、授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする。」以前の条文では下線部分が「実施に努めなければならない」となっていましたが、義務化によって組織的なF D活動が求められる事になりました。

A-3 F D活動の範囲は、どこまで行うのですか。

大学設置基準等においては、F Dの実施を各大学に求めています。その範囲や内容に関しては各大学が工夫できるようになっています。本学では、平成20年4月にF D委員会を設置し、「多様な学生の増加に対応した教育の質の向上」を目標に、I C T (情報通信技術) とI D (インストラクショナル・デザイン) の利活用や制度の改善を図りながら、P D C Aサイクルを推進するという取組を開始しています。現在、F D委員会に9つのワーキング・グループを設置し、活動しています。

- ①WG 1 : 学生による授業評価アンケート
- ②WG 2 : ピアレビュー制度の導入
- ③WG 3 : G P Aとコンピテンシーの導入
- ④WG 4 : I C Tの活用推進
- ⑤WG 5 : イベント・教育活動支援情報の企画
- ⑥WG 6 : チュータ制度の導入
- ⑦WG 7 : ファカルティポートフォリオの導入
- ⑧WG 8 : カリキュラム・ディベロップメント
- ⑨WG 9 : Own Teacher制度の導入

さらに、リメディアル日本語教育検討のWGも加わります。

A-4 F D活動は誰が推進するのですか。

各WGは、教員と職員から構成されていますので、全教職員が一緒になって進める活動と言えます。さらに、教育の質の向上のためにP D C Aサイクルを効率的に行うための支援システム (C A N V A S) の開発では、学生が参加し、M E C (メディア開発センター) のスタッフと共同で作業を進めています。

A-5 F D活動をすることによって、教員や学生にはどのような恩恵があるのですか。

本学の取り組みは、文部科学省の平成20年度教育G Pに採択されましたので、財政的な支援を得て、各教員が教育の質を改善するためのP D C Aサイクルを、C A N V A Sを活用して効率よく行うことが可能となります。その成果は、学生が、従来よりも、「よりわかりやすく」、「楽しく」、「しっかり」学ぶことができる学習環境として実現されます。教員も学生も、学習の成果を確認しながら、目標に向かって学ぶことができるわけです。

A-6 F D活動を作業グループに分けて活動を進めていますが、どうしてですか。

I Tのシステム開発では、「システムズ・アプローチ」という考え方があります。「大きな問題」を解決するときには、その大きな問題を分割し、個々の解決策を作り、その後統合し、その大きな問題に適用するというアプローチです。今回のF D活動は「教育の質の向上」という大きな問題を解決するために、いくつかのWGに問題を分割し、最後にはそれらを統合して、目標を達成していきます。現在のF D活動は9つの作業グループに分けて活動を進めています。

A-7 現在何人の教員が直接F D活動に関わっているのですか。

F D委員会および各作業グループに直接関わっている教員は40名です。(全専任教員74名)しかし、「ピアレビュー」や「学生の授業評価アンケート」等で100%の教員がF D活動に関わっています。

A-8 各作業グループ間の活動内容は、どのようにして情報共有しているのですか。

各作業グループは、個々に進めています。毎月1回FD推進連絡会議を開催し、各作業グループのリーダーが出席しています。そこでは、進捗状況や問題を明らかにしながら進めています。FD委員会も同時開催なので、FD活動全体の情報が共有されています。

A-9 FD活動に無関心な教員に関心を持ってもらうための方策は、どうしていますか。

既に、「学生による授業評価アンケート」、「ピアレビュー」、「外部アドバイザーによるカリキュラムレビュー」などを実施して授業見直しのための情報が各教員に提供されています。また、いま開発中のCANVASが完成すると、教員は、自分の授業を見ることが可能になります。このように授業改善に役立つ情報を適切に提供していくことで、FD活動に参加してもらえると考えています。現状に、危機感をもっていただくことが、すべてのスタートとなりますし、それができない組織は、その場から退場することが求められている環境に今、われわれは置かれています。

A-10 FD活動により、学生はどの様に変わってくるのですか。

授業を改善し学習効果を上げることで、学生が主体的に学ぶようになることを期待しています。学習の成果を、学生自身が知ることの仕組みができれば、授業が面白くなり大学へ来るのも楽しくなります。考えられる波及効果として休・退学の減少を期待する事が出来ます。将来的には卒業生の質の向上によって大学の評価も上がると確信しています。

A-11 FD活動はいつまで続けるのですか。

改革に終わりが無いように、FD活動にも終わりはありません。毎年入学してくる学生も変わってきます。世の中の進歩と共に教育の内容も変わります。教材も進歩し教え方も変わります。FD活動を続ける事で、本学も進化し続けていきます。

B-1 WG 1ではどのような事を担当しているのですか。

授業に関する学生の声を収集して、授業改善につなげるしくみを検討します。

具体的には、「学生による授業評価アンケート」や「学生による教員表彰制度」などについて検討しています。

B-2 「学生による授業評価アンケート」の実施概要を教えてください。

年に2回、学期末に実施します。

学生はweb経由でアンケートに回答します。

アンケート項目数は、講義・演習科目が16個、ゼミ科目が7個です。

B-3 授業評価アンケートの回収率はどの程度ですか

webを利用したアンケートの実施はまだ1回の実績しかありませんが、紙でアンケートを実施していたときと比較して約50%の回収率でした。

他大学の多くが、紙からwebに変更して回収率が10~20%になったと報告しています。約50%という値は、アンケートの実施前に、教員を通して学生に授業評価の重要性を伝えたことで実現できたと考えています。

B-4 授業評価アンケートの結果はどのように活用されるのですか。

各教員がアンケート結果を参考に、次年度の授業改善を図ります。

今後、これらの作業はFD支援システムCANVASを利用して行うことになります。

B-5 「学生による教員表彰制度」とはどのような事ですか。

平成20年度に、「学生が選ぶ 教え上手な先生」の名称で実施しました。

学生が高く評価している教員・授業を知って、授業改善の参考とするのが目的です。

選考方法は学生による投票です。学生は、「一番よかった」と印象に残っている教員・授業に投票

します。投票理由も書きます。選考対象は、全教員です。

表彰者数は3名です。1・2・3・4年生の投票から投票数が最大の教員を各1名を選びます。投票は、webアンケートシステムを用いて行います。選ばれた教員には、講演会あるいは公開授業により授業のノウハウを紹介していただきます。

B-6 「教員表彰制度」による、学生の投票結果を教員は知る事が出来ますか。

票を得た教員には、投票理由を伝えています。なお、平成20年度の全投票データについては、教員の了解を取った上で、学内の教職員に公開しています。

B-7 「授業評価アンケート」や「教員表彰制度」以外にWG1で検討している事はありますか。

「リアルタイムアンケートシステム」を検討していて、近々運用を開始する予定です。これは、毎回の講義ごとに、学生が感想・理解状況・質問などを携帯電話やweb経由で教員に伝えることができるシステムです。また、「授業改善に関して学生が議論し、その結果を提案するしくみ」についても検討する予定です。

WG2 - ピアレビュー制度の導入

C-1 WG2はどのような事を行っていますか。

FD活動の一環として本学にピアレビュー制度を導入し、これを実質化するための支援活動を行うことです。支援活動には、(1)実施案の作成・改訂、(2)教員間の連携・調整、(3)実施の促進活動、(4)結果のとりまとめ、(5)結果の活用方法の検討などが含まれます。

C-2 ピアレビューとはどういう事ですか。

授業の評価を専門的・技術的知識の有する同業者・同僚(ピア)によって行われる制度をいいます。簡単にいうと教員同士の授業参観制度です。

C-3 ピアレビューを行う目的は何ですか。

同僚のアドバイス等を、個々の教員の授業改善に活用することです。

C-4 ピアレビューを教員の評価に利用しますか。

教員の評価には利用しません。

C-5 ピアレビューではどの教員の授業を参観し、また、どの教員から自分の授業を参観されることになるのですか。

教員を、2~3名のレビューグループ(以後、RG)に分割します。各教員はRG内の教員を参観し、また、RG内の教員から参観していただきます。

C-6 RGはどのように決めるのですか。

5つの組織(先端経営、システム情報、医療情報、情報メディア、教養教育)内で、原則WG2のメンバーが組分けをします。どのような組分けがよいかについては各組織で、よく検討してください。

C-7 授業の参観では、どのような視点で授業を参観するのですか。

参観項目は、「授業の運営方法」、「学生の参加度」、「メディアの工夫(黒板・白板・PPT・配布資料・DVD等)」、「その他(自由項目)」とします。これらの項目につき、(1)評価できる点、(2)改善した方がよいと思われる点を参観してください。

C-8 授業参観は何時行えばよいのですか。

ピアレビュー期間に、RGの教員の科目を自由に参観してください。ただし、ピアレビューが滞っている場合、WG2教員および学科主任が督促することがあります。

C-9 RG内で事前にスケジュール調整をしてもいいですか?

かまいません。WG2教員および学科主任はスケジュール調整には関与しません。

C-10 授業参観後、何をすれば良いのですか。

できるだけ早い時期に、事後検討会を実施し、授業に関する意見交換をしてください。その後、授業参観の観察内容と事後検討会の内容をレビュー報告書にまとめて提出してください。

C-11 レビュー報告書のフォーマット（書式）は何処にありますか。

F D委員会活動状況ポータル^{*1}にWordファイルがアップロードされていますので、これを利用してください。

※1 <http://galant.do-johodai.ac.jp/scripts/dnet/dnet.exe>

C-12 レビュー報告書の提出は誰が行うのですか。（授業者 or 観察者）

レビュー報告書を観察者からうけとり、事後検討会の内容や授業実施者のコメントを加筆したあと、授業を実施した教員が提出します。観察者は授業実施者に提出するだけでよいこととなります。

C-13 授業参観を複数の教員が行った場合、レビュー報告書は1つでいいですか。

かまいません。観察者から受け取った報告書を、授業実施者が一つのファイルにとりまとめて提出してください。

C-14 同じ教員の授業を複数回授業参観した場合、報告書は1つでいいですか。

かまいません。授業の日付、受講者数の項目は一つしかありませんが、自由に加筆してください。

C-15 提出するレビュー報告書のファイル名は決まっていますか。

管理の都合上ファイル名を決めています。ファイル名は授業者氏名-観察者氏名.doc（例えば、向原強-中林秀和.doc）としてください。3人以上の場合は、授業者氏名-観察者氏名1-観察者氏名2.docと続けてください。

C-16 レビュー報告書はどの様に提出しますか。

ピアレビューのメーリングリスト^{*2}に添付ファイルでメール送信してください。電子化して共有しますので、手書きではなく、この方法による提出をおねがいします。

※2 review2009@ml.do-johodai.ac.jp

C-17 提出したレビュー報告書はどのように扱われますか。

レビュー報告書は大学の共有資産として蓄積し、公開されることを前提とします。ただし、教員の授業改善を目的として集積されるものであり、それ以外の用途には使用しません。

C-18 ピアレビューに関する不明な点、意見、改善策がある場合、誰に連絡すれば良いですか。

各学科のWG2担当教員（先端経営：坂本、システム情報、教養：梅津、医療情報：向原、情報メディア：大島）に連絡してください。

WG3 - GPAとコンピテンシーの導入

D-1 GPAとはどのような事ですか。

もともとは成績の加重平均（Grade Point Average）ですが、現在では、厳格な成績評価や教育体制を改善する活動全般も意味する言葉として使われています。

D-2 GPとはどのようなものですか。

Grade Pointの略で、科目成績に連動する値です。本学ではGPの値として4～0の5段階を採用します。

D-3 GPAを求める計算式を教えてください。

計算式は次の通りです。

$GPA =$

$(\text{科目の単位数} \times GP \text{の値}) \text{の累計} / \text{履修登録単位数の総和}$

D-4 履修登録した科目を放棄するとGPAの値はなるのですか。

放棄した科目は「不可」となり、GPは0点です。しかし、計算式の分母の履修登録単位数から放棄した科目の単位数は引かれませんがGPAの得点は下がります。なお、履修取り消し制度については今後検討します。

D-5 GPAの導入目的は何ですか。

導入によって教員、学生の双方が教育、学習体制を改善し学習効果を上げるのが目的です。GPAは大学の認証評価の対象項目にもなっており、事実上、義務づけられている制度です。

D-6 GPAの導入で成績評価がどう変わりますか。

「優」「良」「可」「不可」の評価は変わりませんが、「優」にはGP 4点かGP 3点が当てられますので、GPAに関しては5段階の評価になります。

D-7 なぜ、最高評価語に「秀」を使わないのですか。

他大学では「秀」の評価を用いているところもありますが、まだ「秀」が地域の企業に認知を得ていないこと、また、システム改修をできるだけ小さくしたいという理由から試行導入の段階では使いません。

D-8 成績評価基準の評点には出席点も加味するのですか。

成績評価の方法は現行通りとし、変えません。つまり、評点の中に出席点を入れている教員と、そうでない教員がありますが、試行段階においては評価方法は従来通りです。

しかし、「優」についてはGPの値を4点と3点に分けて評価していただきます。

D-9 GPAはどこに表示されるのですか。

学生個人の成績表に表示されます。なお、成績証明書には記載されません。

D-10 GPAの値を何に使うのですか。

試行段階では、GPAは主に学生の学習指導に使います。また、科目GPAについては、教員が授業改善に役立っています。

D-11 将来、GPAは何に使うのですか。

現在検討中ですが、進級・卒業条件、優秀学生表彰、奨学生の選抜、大学院推薦入学、就職時の学内推薦などがGPAの活用として考えられます。

WG 4 – ICTの活用推進

E-1 IDとはどのような事ですか。

Instructional Designの略で、教科（コース）の開発にPDCAサイクルの考え方を取り入れたもので、学習目標が明確なコースを設計する開発手法の一つです。

E-2 ICT活用レベルとは何を示していますか。

ICT（Information and Communication Technology、情報通信技術）を講義に活用すると、学生により分かりやすくすることができるのと、学生のモチベーションを上げるのに役立ちます。この観点で、より容易なレベルから、技術的に難易度の高いレベルまでをレベル分けしたものが、ICT活用レベルです。現在は、5段階にレベル分けしています。

レベル	内 容
1	パワーポイント、DVDの活用 共有フォルダによる講義資料の提供
2	LMSを利用した小テスト機能 課題提出機能の活用 クリックによる双方向授業の実施
3	Video on Demand教材の提供
4	体験型教材（ゲーム、セカンドライフ、シミュレーションなど）の活用
5	LMSを利用した適応型学習環境の提供

E-3 ICT活用レベルのレベル1にパワーポイントを授業で活用することが挙げられていますが、パワーポイントを使った授業を行えば良いのですか。レベル1になるという事ですか。

パワーポイントを使用して授業を行えば、形式的にはレベル1になります。

しかし、ICTを講義で使う意義として、学生により分かりやすい教材を提供することがあります。パワーポイントを使うということは、教える内容を視覚化し、よりわかりやすい説明を可能にすることです。このような工夫をして始めて、パワーポイントの教材が生きてきます。

E-4 POLITEとは何ですか。

本学が、現代GPのプロジェクトで開発したLMS (Learning Management System) です。オープンソースLMSのMoodleを拡張し、カリキュラム型学習環境と検索型学習環境を提供するものです。カリキュラム型学習環境では、学習者適応型教材の提供を可能としています。Moodleとしての活用も可能です。

E-5 LMSとは何ですか。

Learning Management System (ラーニング マネジメント システム) の略で、日本語では学習管理システムと呼ばれます。インターネットやイントラネットでeラーニングを行う際、教材の配信設定や学習者の履歴などを管理します。

E-6 POLITEではどのようなことができますか。

ワープロ、パワーポイント等で作成した資料の提供 (学生がダウンロード可能)、小テスト (多肢選択式、記述式、穴埋め式など)、レポートの収集 (テキストファイルやワープロなどのソフトウェアで作成したファイルの提出)、掲示板、アンケートの収集などが、POLITEを使えば比較的簡単な作業で可能になります。

また、POLITEのフル機能を使うとレベルの異なる教材を学習者の理解度に応じて提供できる教材も作成可能です。

E-7 クリッカとは何ですか。

A R S (Audience Response System) のことで、学生からリアルタイムに反応を得るシステムのことです。本学で導入しているものは、電卓より少し小さなボックスに6個のボタンが付いており、ボタンに対して意味づけする事により反応が判定できます。

E-8 クリッカを効果的に使うポイントはありませんか。

次のようなことが言われています。

- ・あまり少人数では効果がない (20人以上がめやす)
- ・質問は固めず、ばらばらに行う
- ・10分から20分に1問程度
- ・質問・選択肢は短くシンプルに
- ・意図的にあいまいな選択肢をいれる
- ・ディスカッションをはさんで同じ質問をする
- ・遊び感覚で、習慣的に使い続ける。

WG5 - イベント・教育活動支援情報の企画

F-1 WG5ではどのような活動をしていますか。

WG5は各イベントの組織、広報、開催を通じて大学の教育活動の継続を支援しています。

F-2 WG5が行う主なイベントは何ですか。

WG5による主なイベントは新任教員支援を目的とした2段階から成るワークショップ・講演の運営です。

F-3 他のWGグループはWG5のイベントに助言できますか。

はい、できます。私たちはいつでも喜んで他のWGの意見を伺いたいと考えています。

F-4 WG5は他のWGが宣伝、広報することを支援してくれますか。

はい。WG5は全ての関係者にEメールで連絡し、各イベントの広報のためのポスターやチラシを作成し掲示します。

F-5 WG 5はFD関連イベントのポスターを作成してくれますか。

はい。日時、場所、テーマを連絡いただければポスターを作成し、FDウェブサイトにもポスターをアップロードします。

F-6 WG 5とFDウェブサイトの関係はどのようになっていますか。

WG 5はFDウェブサイトの設計を行いました。WG 5はそのコンテンツやその掲載に対してではなく、ウェブサイトのレイアウトやイベント情報に対して責任を負っています。

F-7 WG 5はFD関連ではないイベントの支援はしてくれますか。

残念ながら、行っておりません。WG 5はFD関連のイベントのみを支援対象としています。

F-8 WG 5は他のWGのイベントを全て組織、運営してくれるのですか。

いいえ。WG 5はウェブサイト、Eメール、ポスターにてイベントの広報を支援します。

F-9 WG 5の会議は何時行っていますか。またWG 5にはどのように連絡すれば良いでしょうか。

WG 5は少なくとも月1度は会議を行っています。オブザーバーとしての参加も歓迎します。WG 5の責任者にはEメールsimon@do-johodai.ac.jpで連絡を取ることができます。

WG 6 – チュータ制度の導入

G-1 チュータとはどのような意味を持っていますか。

チュータとは家庭教師、個別指導教官、個人指導者（教員または学生）の意味ですが、本学では学生がチュータとなります。チュータの指導は教員が行います。

G-2 チュータ制度の目的は何ですか。

チュータは教員と連携しながら徹底的に学力やスキルのボトムアップを行い、学士力を保証する体制を補完する仕組みとなっています。いわば「学生主体のリメディアル教育」という位置づけになります。

G-3 チュータはどのようなことを指導するのですか。

当面「英語」「数学」「プログラム言語」の科目に絞ってチュータを発足させます。これらは必修科目なので大学全体の取組にもなります。他に留学生のための「日本語」を指導するチュータも必要と考えています。

G-4 チュータの対象科目は固定ですか。今後、科目が増える可能性はありますか。

他の科目で希望があれば検討します。初年度の状況を見て、来年度以降の実施科目を検討します。

G-5 チュータを担当する学生はどのような学生ですか。また、どのようにして選ぶのですか。

学業優秀な3、4年生や大学院生に「チュータ」になってもらいます。学習を指導するという事で「学習チュータ」といいます。

また優秀な留学生には後輩の留学生を指導する「留学生チュータ」になってもらいます。留学生に日本語を指導する「日本語チュータ」には日本人の学生に担当してもらいます。

チュータは担当科目や関係する教（職）員が選びます。原則的に学生アドバイザーやSA、TAと兼任しないのが望ましいと考えています。

G-6 チュータを必要とする学生はどのような学生ですか。また、どの様にして必要とする学生を選び出すのですか。

主に1、2年生を対象とし、単位が取得できない学生、基礎学力不足のため、講義内容についていけない学生が対象となります。

留学生では日本語の学習援助や生活面での指導が必要な留学生が対象となります。担当科目や関係する教（職）員が選び出します。

G-7 3、4年生で学習指導が必要な学生はどうするのですか。

教員やゼミの先輩に指導にあたってもらいます。

G-8 どのくらいの数で実施する予定ですか。

最初は各科目10名前後の学生を、5～6名のチューターが指導する体制を作ります。

G-9 チュータリング（指導）は1回きりで終わるのですか。

他の学生と同等のレベルに達するまで複数回のチュータリングを実施します。ただし、一定の区切りは必要なので無期限での指導は行いません。

G-10 チューター制度の実施はいつからになりますか。

21年度後期からの実施を予定しています。

G-11 チュータリングは常に1対1で行うのですか。

1対1が基本ですが、状況によっては補習形式で、複数のチューターが複数の学生にチュータリングをするケースも想定しています。

G-12 チューターが活動する時間・場所・内容はどのようなものですか。

活動時間は学期中随時で、空き時間、昼休み、放課後等なります。また、活動場所としては図書館・実習室・ピアサポートルーム（空いているとき）等があります。

チューターが指導を行う内容は、個別教科の指導や学習方法についてのガイダンスが中心で、スタートアッププログラム期間中（4月、9月）にチューターが全体を対象としてガイダンスを行うこともあります。

G-13 チューターとチューターの指導を受ける学生を、どのように結び付けるのですか。

検討中ですが、チューターの指導を受けるように教員に指示された学生はチューター事務局（仮称）に出向き、チューターとマッチングしてもらいます。

また、指導が終了すれば終了の報告書等を教員に提出します。

G-14 チューターはなんらかの報酬をもらうのですか？

報酬については現在検討中です。

G-15 資格取得を支援するチューターを置いてほしいのですがどうでしょうか。

資格取得に対しては全学的に支援する体制を取っています。学習支援センターと連携をとり、必要に応じて資格チューターの導入を検討したいと考えています。

WG7ーファカルティポートフォリオの導入

H-1 WG7ではどのような活動をしていますか。

授業の改善に必要な全ての情報をファカルティポートフォリオに蓄積するための支援活動を行っています。

たとえば、各教員の授業内容は映像データベースとしてファカルティポートフォリオに蓄え、いつでも授業を閲覧し、評価検討できるシステムや、学習授業評価アンケートの結果、ピアレビューの結果も蓄積し、それらを閲覧しながら授業改善計画やシラバスを作成する環境を構築します。システムの実装はFD支援システム開発チームが主に担当しています。

H-2 ファカルティポートフォリオとはどのようなものですか。

ファカルティポートフォリオは授業改善のために必要なあらゆる情報を整理・統合し蓄積したデータベース（リポジトリ）の形で実現されます。これは、「多様な学生の増加に対応した教育の質の向上」を目的とした授業改善のために、PDCAサイクルの核となるように位置づけられたものです。

WG 8ーカリキュラム・ディベロップメント

H-3 ティーチングポートフォリオとはどのようなものですか。

教員の教育活動の記録及び教育業績を証拠資料にもとづいて記述した書類です。

授業改善に役立てること、教員の教育活動がより正当に評価され努力が報われるための証拠付けになること、個々の教員の「優れた授業」「巧みな工夫」「熱心な指導」を共有の財産として他の教員に還元されること、がその目的とされています。

※1

※1 土持ゲーリー法一；ティーチング・ポートフォリオ、東信堂

H-4 講義概要とシラバスの違いは何処にありますか。

本学でシラバスと称しているものは、学生に冊子として配布されている「講義概要」の内容を指しています。

しかし、WG7で考えているシラバスは、講義の概要を記した1ページの紙ではなく、授業選択のガイド、教員と学生の契約書、学習効果を高めるための文書、授業の雰囲気伝える文書、学生や職員さらには社会と教員とのコミュニケーションの道具、授業全体やカリキュラムをデザインするための文書など、多くの役割を持つ文書と捉えています。

したがって、シラバスが教育の質の向上に大きく関連を持つと考えています。※2

※2 愛媛大学；Faculty Development Handbook

H-5 FD支援システムの開発スケジュールはどの様になっていますか。

H21年度6月末まで第1次モニタ教員でテストを行い、それ以降、H21年度いっぱい第2次モニタ教員によって試用期間とする予定です。

H22年度から全教員による試用フェーズに入ることになっています。

I-1 カリキュラム・アドバイザーボードの役割とは何ですか。

本学のカリキュラム及び教育活動が、社会のニーズの変化や情報技術の進展等に適切に対応しているかをレビューし、FD委員長に答申することです。（規定の第2条）

I-2 カリキュラム・アドバイザーボードは、どのようなメンバーから構成されていますか。

10名程度の外部アドバイザーをもって組織します。外部アドバイザーは、主に企業における経営、情報、メディア及び医療等の分野において高い識見と経験を有する本学以外の者としています。（規定の第3条）

現在は、経営2名、情報2名、医療2名、メディア2名、教養1名の計9名から構成されています。

I-3 外部アドバイザーの任期は、何年ですか。

外部アドバイザーの任期は、2年です。ただし、再任は妨げないことになっています。（規定の第4条）

I-4 カリキュラム・アドバイザーボードの庶務は、どこが担当しているのですか？

教務課が担当しています。（規定の第5条）

I-5 外部アドバイザーは、どのようにして決められましたか。

まず、各学科主任及び教養主任が外部アドバイザー候補者を選定し、その後WG8、FD委員会等で検討しました。

その結果をFD委員長が推薦し、学長が委嘱しました。

I-6 外部アドバイザーによるレビューは、どのように行われましたか。

平成21年2月20日（金）に第1回カリキュラム・アドバイザーボード会議を開催しました。事前に、「講義概要」と「各学科と教養科目の特徴」の資料を配布し、開発したカリキュラムレビューWeb

システムを利用して、レビュー結果を入力してもらいました。

カリキュラム・アドバイザーボード会議では、各学科主任及び教養主任の説明と質疑応答、そして各外部アドバイザーからコメントを頂きました。事後に、追加のコメントを3月末までに入力してもらいました。

I-7 外部アドバイザーからのレビュー内容には、どのようなものがありましたか。

学部学科に共通する主なものとして、

- ・目標とする人材像、スキル像の明確化と科目への展開
- ・学ぶ気力や学問に関する興味の強化
- ・主体的、自律的学習を中心とする教育方法
- ・問題の発見・分析・解決能力、コミュニケーション能力等の養成
- ・情報倫理、企業倫理の教育
- ・基礎学力の向上
- ・基礎体力の強化プログラム
- ・英語力（情報に関連した内容、英語で議論）
- ・集中、繰り返しで効果が上がるような授業時間配分
- ・学科をまたがる情報大学らしいプロジェクト学習（例：IT農業）

などが挙げられました。学科毎の詳細な内容に関しては、「FD委員会活動状況ポータル」：

<http://galant.do-johodai.ac.jp/scripts/dnet/dnet.exe>の「文書管理」・「FD委員会共有フォルダ」・「WG 8 学部カリキュラム開発」・「アドバイザーボード関連」で、閲覧できます。

I-8 外部アドバイザーからレビューを受けて、どのようにカリキュラムを見直そうとしているのですか。

外部アドバイザーから指摘された「目標とする人材像とスキル像を明確にし、それに基づき必要な科目を決めていく」アプローチをとっています。具体的には、本学の「建学の理念」や「教育の目標」を元にして、「育成すべき人材像」と「その人材を育成するために必要なコンピテンシー（知識・スキル）を学科及び教養毎に明らかにしていきます。その後、コンピテンシーを実現するために必要な科目の見直しを行います。各学科及び教養で、次のカリキュラムに向けて検討が進められていますので、それらの内容が、今回の枠組みの中で整理

されていくこととなります。

I-9 コンピテンシーとはどのようなものですか。

コンピテンシーとは、「知識やスキル」、「職務において高業績をあげている人の行動特性」などの意味で一般に使われています。しかし、本学では「知識とスキル」と定義し、「～ができる」という形式で記述するようにしています。

I-10 カリキュラム見直しのスケジュールはどのようになっていますか。

カリキュラム・アドバイザーボードのレビュー（平成21年3月末判）を元に、現在、第1次原案作成を7月末日処に検討が進んでいます。

- ・9月には第2回カリキュラム・アドバイザーボード会議のレビューを受け、その後、第2次原案を作成します。平成22年2月の第3回カリキュラム・アドバイザーボード会議を経て、3月には新カリキュラムを確定し、1年後の平成23年度新カリキュラムとして移行して行く計画です。

WG 9 – Own Teacher 制度の導入

J-1 WG 9 ではどのような活動をしていますか。

昨年度までWG 6 が担ってきたチュータ制度とオウンティーチャー制度のうち、WG 9 は今年度4月からオウンティーチャー制度を検討する任務を与えられました。そのため月1回の会合を持ち、活動を始めたところです。

4月はWG 6 の竹内先生から「今までの経緯」、5月は広奥先生から「金沢工大の訪問調査報告」、6月は穴田先生から「初年次教育を中心とした教育サポート体制」を聞き、広く初年次教育の役割や大学教育における教員と学生との関係について勉強しています。また、オウンティーチャーの概念が曖昧なので、それを明瞭にして他の関連する制度と役割分担をしようとしています。

J-2 オウンティーチャー制度とはどういう事ですか。

まだ明確な定義がありませんが、一人一人の学生が気楽に相談でき、話し相手になる特定の教員を持つ制度です。これにより退学者を減らし、学生と教員との良い関係を築くのが狙いです。今年度は、1、2年生の問題に対して、クラス担任が対応し、必要時に専門ゼミ教員がサポートする制度を試行中です。

J-3 オウンティーチャーの対象となる学生は全学生ですか。

まだ決まっていませんが、初年次教育に重点をおいています。1年生のうちにオウンティーチャーと良い関係ができれば、その後、関係は続くだろうと予想しています。

J-4 オウンティーチャーについて他大学の取り組みはどうなっているのですか。

調査中です。

J-5 オウンティーチャーによる教員の負担はどれくらいありますか。

検討中です。概算では1年生380名を74名の専任教員で対応すると、教員あたり5、6名の数になります。その上、ゼミ学生を抱えるので、負担のバランスを取る必要はあると思います。

J-6 学年進行によってオウンティーチャーは変わりますか。

現在、WGで検討中です。

J-7 クラス担任やゼミ教員との関係はどうなるのですか。

この制度は他の教員との連携協力関係が重要です。学生が相談できる相手がさらに増えると考えて良いでしょう。

K-1 CANVASとは何ですか。

北海道情報大学が、組織的なFD活動を推進するために開発している「FD支援システム」のことです。

K-2 CANVASは何の略ですか。

CANVASは、
Creative Activity for Nurturing Value-Added Students
(by using a Faculty Development support system)
の略です。

Nurtureには、「大切に育てる」という意味がありますので、教員がFD支援システム(CANVAS)を活用して「付加価値のついた学生を大切に育てるための創造的な活動」をするという願いがこめられています。真っ白なキャンパス(CANVAS)に、各々の先生の教育内容を、描いてもらうという意味合いもあります。

K-3 CANVASで何ができるのですか。

CANVASを利用することで、授業改善のためのPDCAサイクルの各フェーズにおいて実施することを、半自動的に行うことができるようになります。

たとえば、授業改善計画の作成(Plan)、ICTやIDを活用した教材開発およびICT活用の授業展開(Do)、学生による授業評価やピアレビューの結果確認(Check)、自己点検や必要な研修をeラーニングで受講しながら改善(Action)などです。

K-4 CANVASを使うことのメリットは何ですか。

CANVASから、授業の段階に応じて適切なアドバイスが行われます。そうしたアドバイスを参考にすることで、より質の高い授業改善が実現できます。

また現在は特に、ICT活用やインストラクショナルデザイン活用のスキル向上を目指した内容となっています。

K-5 CANVASの開発状況を教えてください。

CANVASは平成20年度の教育GPに採択され、平成20年11月から開発をはじめています。現在、プロトタイプが出来上がりモニターの教職員がシステムテストや機能の改善に取り組んでいます。後期から、各WGリーダーや関連のWGメンバーの皆さんに試験評価をしてもらいながら、より使いやすいシステムに仕上げ、平成22年度から全教員が利用できる予定です。

K-6 CANVASの開発は何処が行っているのですか。

教育GPシステム会議が中心となり、開発を行っています。主な構成メンバーは、次の通りです。

- ・本学教職員：富士隆副学長、藤井敏史教授、谷川健教授、山北隆典教授、市川泉情報センター事務室長
- ・メディア教育センターの技術者：恵藤副センター長、福井雅隆、安倍隆、前田諭、前田真人、平野雄一
- ・学生：泉文彦、直江和弘、小早川直紀、長谷川拓也、長谷川知也、鈴木裕介、谷口恭進、五十嵐啓介、高橋泰明、松山雄太

FD活動 今後の行事予定

日 程	行 事
9月10日（木）	ICT／ID関連研修会 －ICTを講義でこう使っています－
9月14日（月）	FD研修会 －初年次教育の取り組みについて－
9月18日（金）	第2回カリキュラム・アドバイザーボード会議
9月30日（水）	FD委員会・FD推進連絡会議
10月29日（木）	平成21年度第1回教育GP推進協議会



編集後記

私が「GPA」という言葉を初めて耳にしてから、7、8年になるだろうか。言葉は知りながら内容を学ばないでいた不勉強がたたって、この1年半は猛勉強を自分に強いる羽目になった。それだけに、GPAが記載された成績表が配布されることには感慨を覚える。

都合により、今年度後期からはWG3のリーダーを豊田先生に交代して頂くことになった。私が非常に要領の悪い（GPAの低い？）リーダーだった点をお許し頂き、引き続きGPAに関するご意見をWG3までお寄せ頂くようお願いしたい。

(WG3 三浦)